

藩鑑卷之百五十五目錄

三部十一

藤堂大學頭後原高次

同 和泉守後原高久

藩鑑卷之百五十五

藤堂

大學以後系高次、和泉守高虎か
長男なり、童名を大助といひ後に
大學助よあり、たむ元和二年正月
従五位下を叙し、寛永七年十一月
封を襲く、同十一年

大猷院殿山上洛のとき供奉し七月
作によりて従四位下に叙し侍従
に任し大宰政を轉任す寛文六年
十二月九少将に進み同九年九月致
仕し延寶四年十一月十六日卒す
年七十六なり

一寛永十四年十二月に後堂大宰頭高次
清円急に亡く今度肥前國島原の城せ

めに松平信長も信綱戸田九門氏族五人
ををりて是は落城のひびくよこもあると云
は重く大宰政をへりてしよし作
は是はいつきは家中ましくもそは作
らも重く作出は是は次第早速出馬あ
るへきよし作觸るその以後は軍法
の事何のい沙汰もこもるにつき
家老とももこもは不審なる事は家中

に用意仕立とそりり作付しとく此
軍法の由沙汰こそあるさにつさ伺ひ
へ大孝次及由一い一度尋ねる存念の
はとすすへ一今夜島系表へ板倉
内膳重昌石谷十庵とつらいさま
松平伊豆守戸田九門と先をいさ
ましく明ぬましくこの大孝とをいさ
いよお成いとさハ軍法も子組も入す

い諏訪八幡も照説あま一番の先子ハ我
等二番ハ玄久 和泉 三番ハ高通 佐渡 と三
つよ分く一二里ほど前に腰兵糧とつひ
行掛りに無二無三に攻りけ何もいさ
さよく討死と心得く行くへさなり
この存念もハ軍法も入すとす
れ一よ一別ち高次の家の浪人の物
語を聞くなり 両雪の友

一 明曆三年正月十九日江戸中大火に及
小山石川より出火折着辻風烈く車輪
のうきさほのは飛び散り十町二十町
外に燃つて幸田時二十餘箇亦既
本丸の所も危く居えけるゆへ
後右公西丸へ刀をせらまけしに拵橋
火移り渡河つくと金議ある不
後右公ついで思召けん水腰物を伊拔安

後右系進重長に水渡し水刀を水野監物
忠告に水渡し橋を渡りたまふは供の法
士残らず渡ると不や橋は焼落けるさ
て西丸へ火も移らず城中は去黒に
て女童の叫聲梁瓦の崩る音震動の
こも今にも敵が来るありまよな
り人をも護りなり西門を固む夜よ
入まハ井伊掃部頭西門に人をあけ謀の

子兄ゆ。やと尋。とてた。此門をた。と。り
後堂大寺。改高次。り使。り。掃。改。及
へ。上。へ。事。あり。と。忠。孝。何。事。と
と。答。ふ。

大樹の益。此。機。嫌。に。此。座。也。且。大。火。よ。い
ま。一。方。一。道。心。の。考。も。あ。る。へ。言。也。此。身。と。集
ハ
神君の。此。と。言。より。一。此。先。子。作。舟。ら。も。

身。る。ま。ハ。人。数。三。百。騎。雜。兵。三。千。餘。人。ハ。代
洲。河。岸。へ。唯。今。繰。出。し。一。所。出。し。自。然。道
心。の。考。も。あ。る。ハ。作。舟。ら。も。一。番。に。宗
舟。臨。漬。し。一。一。此。心。得。の。た。め。一。つ
ら。す。の。よ。し。
爰。有。公。を。は。し。め。を。り。諸。大。名。聞。人。悦
ハ。思。ひ。ま。け。し。流。石。ハ。所。々。高。名。を。題。し
た。る。和。泉。も。高。虎。り。子。な。り。と。と。く。養。ふ。

る此のハチウリケ。高次ハ兼く若みある大將なるハ兵三百騎に皮羽織立舟一やうに具足箱旗竿持せ馬に鞍並後ハ垂兵狼腰よつけまゝに挑燈灯一ハ代洲河岸に一面に繫ルハ腰掛足程大將ハ組の考ハ切大繩ハ火舟玉葉丈丈に用意一たり高次ハ白羅紗の大事ハ羽織袴の紫の紋金狼にせし縫舟目色の立舟と名一

白星縫たる五枚下の頭巾を冠り四寸にあまる黒馬金具に替るの紫打たる梨子地の鞍と並厚総の鞆をけお繋り軍配並とり其中に馬と居へほんかり丸右ハ立させ山珠の焼ると睨く扣一ありマコト実ハ勇一しくそんえよけるマコト火も焼り本より逆心の人もなく日出度津代とありぬ

古老物語

一 大学及深井の屋敷を廣く種々の
風景を写し榮耀を事とし人の
誇をうまつす以下ハ井伊掃部及と
大学及西國の先主と作舟を運ける
に掃部及大老の役ゆへ常に江戸詰の
事なまはし何所も不口にお立りさるへ
一 我勢州へ改國のうりせよ愛あは
んとさハ早速用つとあうらん

兎角病懶氣隨の馬鹿者といをさ下屋敷
に引籠りあはるんとくハ暇出ても
改國の事ハ辞退しとくハ松山よ暮
ありしとなり
寧國秋葉

一 後堂大学既ハ深井屋敷へ徳后の
さま家督和泉と上屋敷に居りまはける
不にさる浪人より拂ひ刀金五拾支
に乞買求らまは阿弥へ見せらまは

ハ金五十枚の折紙舟なるにありて堀
出——せ——とくたまたに悦ひ——さ
まける。而に大塚以上屋をへ系らまじり
けハ堀出——とりのさまじりよ——何屋
をより堀出まじりや屋の井戸より
に——も堀出まじりやと態ととりけ
るらまじりハ和泉を挨拶よさやうま
ハ中な——浪人の方より五十枚に調ハ

刀を本阿弥へを——五十枚の折紙と
取ハよつさ堀出——と——儀ハ中ハと
ありけまハ大塚——ま——何屋を
より堀出まじりと存ハ所にさ——浪
人の手系より五十枚に——調ハ道具五
十枚ありハとの後よりやマヤの儀
ハ大塚をさ——さぬ——ハ大塚ハ
五十枚——ハ五十枚ハ調ハ百

枚了——いものハ百枚も潤くハ儀ハい録ハ
浪人ハ其刀を月とも口とも極——て大切ハ
——いものなるん浪人ハハ五十枚の
代金お渡マシヤウアと——マシヤ
つふ別ち用人方より浪人と呼あせ右
の刀ハ残金三十支の條お渡——けると
なり

武林隠見録
武門流説拾遺

一 菱堂氏從四位下九少将大學頭高次朝臣

ハ双有さハ活械の大にそく兎角大名ハ金
根成寶と人ハ施すものとして志マシりて
立たり早竟奥意ハ人と接するの良カな
り庭を化り樹木を植ると樂とする事
天下に並ハるり——或春花見のとき
大名中高次ハ屋敷ハ貴所庭の桜
花類ハるくいし——何卒尚三月ハ推系
——とあり——とさ大寺院ハ

安事事に多くい出さへと約束せしむ
ハツの年三月十一日と約したり志
つたに其朔九日の前夜大嵐五降を中
の桜花つほみも半開も散るにありと十
一日の花見思ひもよくぬりありたり
こもようりく家来ともつとせんと當
惑して大子江子何ひの所高次ちつ
とも困りたる顔色ありとそくまを案

す。事江戸中の極楽屋と詮議し
り。いま。桜樹を求めく極々へとあり
しゆへ又家来ハハ中。今九日明日
あつに極替らまき。さと答けまハ高
次。と笑ひをさるり。の了。答な
さ。そ。志。ゆ。る。本。ハ。根。際。より。挽。切
花。の。う。り。さ。本。を。求。た。る。を。根。際。より
挽。切。く。能。は。と。よ。七。ハ。一。ハ。十一日

舎の奥と催せよと下知したり是等の
事一右名の身の上とくハ早竟絶の事
あり物事に屈せざる機分と知るべし
夫らに其後大子次ふつくと庭の物好あ
とくもるく止みたる事一凡三年をり
と過たるころ大子次他出のとき庭表前
柳原町ひしと植木屋ありし何と
るく何事も植木屋少くさひましく植木

ある樹木とも多く植ふると言次當院
のうしろより足く家来より取ぬれ何
とくハ植木屋とも衰微しし植木
とも枯れ哉とありしとき家来を
しハ以前ハ樹木と好み植はされゆへ
ハ町中の植木屋とも諸國より植木とも
と買集の先上は考ふる不近年若く樹
木の事ハ沙汰と違なく庭成ゆへ買

集の極末とも何方へも賣進ししすいゆ
へ次第に末も痛みくやうは枯し
と養ひてとふ大寺にさくくそまは不便
る事しうを志くといは町の極末残らす
買くくともせよとありしゆへ枯る
も枯るも一本にせよも残らす屋敷よ
買取り高人の大恩澤をかうふりた
り大寺の家末ともは末りすへさや

うるく皆薪に——たるとなりかやう
の大槓の昔語りも明暦大火茶のま
柳系町の本末も引けさるとさの事と

知る 東都事跡合考

一 慶堂大寺院及江戸深井の下屋敷近邊
の百姓地と出買添長十一町は横四町をう
りありけいりよ色々の風景と移し
不し茶屋宮寺と造り奇石怪岩跡ら

大木多く枯たり生木の能く我買す
とも外へ賣する事もありん枯たる
亦いせんいりる。不佞の次は其
不仕合と思つす我を恨みん枯樹の分
残らず價ととす。と作付らる
はとす樹木生枯すへく二千支除と
す元——
寧國亦該叢

一 後堂太子政高次是和泉も高久二男は後

高通を示す令條

條

- 一 我日は身と三度うらみよ人の徳
よあ〜んやと昔よりうらむ事け
にも能心持へ
- 一 軍よ子柄するハハよ及つす仕物ふと
能付るハ目茶なり
- 一 喧嘩の子柄するハ腹立の上の事な

まは主人親へ忠孝とも尸をますはせよ
士を求めく抱ひつゝなり

一人の死すると思ふ事一朝夕心よこ
たすすいよくのんまふものなり

一人の身の上よふとくく羨むへうらす
悪ふとくそしる事あるも道よんと
うつすは必らす方のとくあり
一むさと主人は物ととりくもたう

かたのよあらす民百姓の痛みを知ら
せざるなり

一身を深く思ふ者よ心をゆるし道行

尸をますうよ
一くり初にもつなり尸すは侍と尸
くすうをつさ必らす臆病なる
ものなり

一用よたつこの義理を極し道の心

和泉も後原高久いさハ大守頭高次たかハ長男
に——は——め大助といふい承應
三年十二月従四位下に叙——寛文
九年九月封とい勅い長い正い長い年十二月
侍従に任す元禄八年十二月左少
将に轉任——同十六年四月二十九日
六十六歳に——卒せり
一 後堂和泉も高久いまいまい若いり